素描

これからの 4半世紀を考える

松 下 寛*

未来予測には大きく分けて2通りのアプローチがある。一つはエクスポラトリー（探索的）な予測であり、他の一つはノーマティブ（規範的）な予測である。前者は、例えば外捜法などにみられる考え方で、いわば発展可能性に基づく予測であり、後者は未来目標を達成するために「かくあるべし」とその発展のあり方を考えてゆく予測である。

未来学ブームの初期から中期にかけては、これら予測のうち、エクスポラトリーなアプローチが中心となって種々の手法が開発されたが、最近ではこれに代わってノーマティブな予測が主流になってきている。ノーマティブな方法は、いわゆる狭い意味の予測というより、むしろ未来計画に属するもので、目標達成のための、その設定から遂行にわたる新しいサイエンスといえよう。

この基本的な予測の考え方の転換は、いわば未来についての人々の考え方が、「予測する未来」から「計画する未来」へと大きく変化したことを意味している。即ち、我々にとって大切なことはいかに合理的に未来の好ましい姿をデザインするかということと、その目標を達成するための多くの手段を高い整合性の下でいかに計画してゆくかになってくる。

現在、国の政策にせよ、企業のあり方にせよ、人々の生活指針にせよ、多くの混乱と矛盾が生まれ相互の不信と対立が高まっているのは、国としての、社会としての好ましいゴールあるいはグランドデザインの不在がその原因ではなからうか。生来、我国の活動の特色として、ゴールセッティングは弱いといったんゴールが与えられると官民一体、強力にその達成に努力する点が指摘されてきた。1955年から始まった戦後の我国の経済成長のすさまじさは、上は国の政策展開から下は個人生活目標設定に至るまで、経済的、物

質的に豊かになることが最も好ましいことだという大型のコンセンサスの成立があり、それに基づいてそれぞれに超人的な努力がはらわれたことによる。

それから15年、高度経済成長の終った今日、国も社会も個人もそのゴールを失ない、ゴールなき国、ゴールなき社会の混乱が日々高まりつつある。

しかしこの形は、ある程度予想されたことであった。経済的、物質的に豊かな社会では、欲求変化を解明したマズローの理論の各種欲求の多重化に見られるごとく、多価値共存の傾向が進行する。そしてこの条件下では単一明快な社会のゴール設定は原理的に困難となってくる。

とはいえ、ここ数年各種の意識調査によって、従来の経済価値に代わって、例えば健康、安全、平和などが新しい中心的な社会価値として登場しつつあることが明白になってきている。ただこれら新しい目標群は決して単一ではなく、中には成長と環境といったような相矛盾する価値の共存も見受けられる。

こういった条件の下では、たとえ複数とはいえ、これからの社会にとって好ましいゴールを合理的に設定するためには、新しくかつ高度なアプローチが必要になってくる。例えば、従来の意志決定の基本的な考え方であった白か黒かという二者択一の原理から、白も黒もある不足を持ちつつ共存する灰色の選択の考え方への移行、それをより具体的に展開する、新しいコミュニケーション技術を含んだコンセンサス成立のための技法の開発などが考えられよう。

ともあれ、豊かさの充足の後、我々は新しい社会を迎えようとしている。これは戦後、はじめて出会う新しい価値観が中心の社会である。新しい社会では新しいサイエンスが必要である。計画のための新しいサイエンスの開発はこれからの4半世紀の未来社会づくりのためのノーマティブなアプローチにとって必須の条件となるであろう。

* Hiroshi MATSUSHITA 野村総合研究所 (247 神奈川県鎌倉市梶原 1600) 取締役技術調査室長